

Interview



□プロフィール

22歳で和太鼓集団「鼓童」に参加。2006年独立しソロ活動開始。2007年アメリカやブラジルなど海外進出を果たす。現在福岡を拠点として活動中。

ながお だいき
篠笛奏者 長尾 大樹さん

北海道の公演を終えた足で、蘭情さんの工房へ寄った長尾さんは、「鼓童」の研修所で始めて蘭情さんの笛を吹きました。他の笛とは全然違い、パワーがあり響きます。蘭情さんは、魂の師匠です。蘭情さんに出会えなかったら今の俺はない。本当に感謝しています」と話す。

さんの手の届く範囲に置かれていた。日本の篠笛は、奏者のメリカリ(※)だけで微妙な音の調整をしなければならず、洋楽にはむかないという難点があった。しかし、蘭情さんは、独自の方法で編み出した竹の内部の構造を変えることで、どんな場面にでも対応できる笛に仕上げる。

いまや、日本の第一線で活躍するアーティストの9割が絶賛する楽器として、またその笛を奏でる奏者によって新しい和と洋の音楽が共鳴し、新しいジャンルの音楽で世界にも通用するものとなった。

一流演奏者との出会い

25年前、飯岡に「鼓童」が公演に来た際、自作の笛を持ち込んだのが、演奏家と出会うきっかけとなった。お払い箱にされるのを覚悟していたが、演奏者の山口幹文氏が「捜し求めていた音に限りなく近い」と使ってくれた。「だから頼まれた笛は、嫌と言わず挑戦してきました。周波数にこだわり、整えることで笛の音はもっと遠くまで届くんです」笛を作っては面識のあるなしに係らず、演奏家の元に送る。当初は、「使えない」という反応が多く、否定のだったが、演奏家たちはみな真摯に蘭情さんの思いを受け止めて、駄目出しをしてくれた。指摘された欠点の原因を改良し、また送った。

「常に頂点を目指し、やるからには地方で終わりたいくない、プロに使ってもらいたいという思いを持ち続けています。私が名門の家元でなかったから改革も容易に出来たのでしょう。演奏者の山口幹文さんらと一緒に製作の過程をともしたお陰で、こんな世界もあったのかと思うようにもなり、横のつながりも出来ました。演奏家の皆さんに育てられたんですね。『駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまた草鞋を作る人』っていうでしょ。それと同じで、いい下職がいていい演奏ができる。一流の演奏家はそれをちゃんとわかっ

てくれているんです」

日本で初めてオクターブ(※)をとった笛を作ったのも演奏家の話がつきかけてきた。「人の出会いと物の出会い、それが広がり、今がある。将来の期待を込めてこれからの若者に言いたいことは、人生は目的を持たなければいけない、努力だけでもためなこともあるけど、自分の世界を探し、己を知ることが大切」と話す。

後継者については「子どもは音楽に興味はあるものの、笛にはまだ興味を持ちません。自分からやりたいと望めばやればいいし、強制はしません」と親の顔を覗かせる。

あくなき挑戦は続く

「今でも、渡した時は恐怖心があります。作った人がそんなはずないと言っても、使う人が駄目だと言ったら駄目なんです。自分で生きなければいけない時代でしたから懸命でした」と、タバコをゆっくり燻らせ、サラリーマンとして働いていた頃が、昨日のことのようだと言語る。



工房に並べられた笛



上総獅子頭

蘭情さんは、仕上がった笛に後のメンテナンスのため銘を刻んでいる。『和』から始まり、改良のたびに、『亥』『申』『雨』『川』『雲』『河』と変化し、今は『天竺』までできた。『西遊記』を現していきませんが、極みの三蔵法師は多分作らないでしょう。作ったら終わってしまいますから」とあくなき挑戦を強いてきた蘭情さんそのものの姿勢が見える。

毎年12月、笛になる竹は一宮にある秘密の場所に出掛け、二トン車に何台も竹を取ってくる。切った竹は一冬だけ天日干しして脂を抜き、さらに3年から4年日陰で干して乾燥させる。軽くなりすぎたものや割れたものを除くと竹は半分以下の本数に減ってしまうという。しかし日本の古典芸能を後世に伝え、絶やすことのないよう、数百年の命を吹き込んでいく女竹取りは今年もまた続く。



自宅を開放しての篠笛教室。1月11日には、東金文化会館で発表会を開催

※メリカリとは、邦楽用語で、低い音を減り(メリ)高い音を上り(カリ)と呼ぶ。
※オクターブは、西洋音楽における「8度音程」のこと。